

盆地地域の開発と災害

甲府盆地西部地域を例として

Agricultural Development and Natural Disaster in Basin Areas:
A Case Study of the Western Kofu Basin, Yamanashi Prefecture

高木勇夫

はじめに

- ① 甲府盆地の開発
- ② 甲府盆地西部地域の水害
- ③ 耕地の開発と水害

【論文要旨】

この小論では、農地開発が、自然現象の河川氾濫を水害という社会現象に転化させるという問題意識を前提に、甲府盆地の西部地域を対象に江戸時代の耕地開発と水害の関係について検討した。

江戸時代における甲府盆地西部地域の耕地開発は、釜無川扇状地と御勅使川扇状地を中心に展開した。ここに被害をもたらした顕著な水害として20件を数え、そのうちの14件までもが1600年代に、さらに19件が宝暦期までに発生している。一方、この地域の耕地開発は、慶長期から宝暦期にかけての江戸時代前半期に盛んに推進されたことが、村々の石高変化から明らかである。なかでも、石高増加の著しいのは、釜無川沿いの村々で、これはそれまでの治水策が不連続堤から、享保期以降に連続堤に転換したことと関連しているものと考えられる。こうしたことから、江戸時代前半期に推進された耕地開発が、水害発生の頻発と関連しているものと考えた。

年号が慶應から明治に変わる1868年7月に発生した水害は、甲府盆地西部地域の村々に大きな被害をもたらしたが、ことに釜無川扇状地南半部の村々に被害が集中している。この水害による村々の被害形態は、各村の位置する立地条件によって大きく異なっていることが明らかとなった。すなわち、笛吹川と荒川の合流点付近の村々は、流失・全潰・半潰など破壊的な家屋被害と石や砂などの粗粒堆積物による田畑の埋没被害を被っている。これに対し、笛吹川と釜無川の合流点付近の村々は、破壊的な家屋被害は被っていないが、屋根裏まで水が浸かる被害を受け、田畑も水中に没したままで被害の把握が出来ない状態に置かれている。さらに、釜無川左岸の村々は、開発した旧河川敷の耕地が、河川氾濫によって元のような川瀬になってしまっている。また、南の曾根丘陵にある村々では、砂礫による田畑の埋没被害や川欠被害を被っている。